

①KENTWOOD 高校滞在記（生徒編）

ケントでの7日間

M.K.

3月24日から3月31日までの7日間、僕はアメリカの KENTWOOD 高校に留学し、ホストのマークの家にホームステイしながら生活を送りました。僕にとって初めてのアメリカ。僕の日本の常識はどんどん打ち破られていきました。事前に聞いていたとはいえ、中でも特に印象に残っているのが、アメリカの同世代の子たちは車を使う、ということです。特にシアトルやケントウッドは広大な土地のため、通学や移動に車を使うことがとても多いそうです。運転席が左側であること、高速道路の道幅がありえないほど広いこと、そして同じ17歳が運転していること…新鮮で不思議で「あ、日本じゃないんだな」と感じる場面、カルチャーショックを受けながらもその新しい出会いに喜びを感じる機会がすごく多かったです。

マークをはじめ、いろいろな人の車に乗せてもらい、たくさんのシアトルの名所へ連れて行ってもらいました。個人的に嬉しかったのはスターバックス1号店に行けたことです。向こうの人にとっても名所である一方、いつもたくさんの人がいるので、マークたちは今回、そもそも行く予定に入れていないように感じられたのですが、行きたい！と頼んでみると快く受け入れてくれました。そして偶然にも待つ人が少ないタイミングで行くことができ、マグカップ、タンブラーなどの限定グッズを買い、そして本場のコーヒーの味を堪能することもできました。万国共通、意思表示って大事だな、チャンスをつかもうとすることって大事だなと感じました。

日本での日常と同じように、平日は Kentwood 高校へ生徒として通学しました。一人ひとりの先生に部屋があり、1日の毎時間同じ授業が開かれていて、生徒たちが科目を選んで受けるというのが彼らのスタイルです。そしてすべてがすごく自由。スターバックスのコーヒーを片手に授業する先生。コーラを飲みながら質問に答える生徒。僕も負けじとビックマックを食べながら授業を受けてみたりもしました。学校の時間のうち半分ほどは日本語教室で、自分で作ってきた日本文化である温泉についてのプレゼンテーションをしていました。相手の目や雰囲気をよく見ながら、身振り手振りや雑談を交えて、プレゼンする。ただの発表で終わらせないように、自分なりにベストを尽くしました。向こうの先生や教頭先生からも「今までのプレゼンで the best だ！」「君みたいな息子がほしかったよ！」などと最大級の賛辞の言葉を送ってもらい、とても達成感がありました。自分の英語で、英語圏で生活する人たちにプレゼンテーションをする。とても貴重で有意義な経験になりました。

僕たちが到着した次の日には、ケント地区の4つの高校の生徒が一同に会して日本文化を愛でながらさまざまな舞台発表やコーナーを開く、Cherry Blossom Festival がありまし

た。

僕たち北野高校チームが披露したAKBのダンスに対してもスタンディングオベーション。すごく気持ちがよかったです。たくさんの方の発表や独特すぎるコーナーの数々を見て思ったのは、「好きなところで、好きなひとが、好きなことをしている」ということ。そしてそれをみんながお互いにリスペクトしあい、盛り上げ、スタンディングオベーションしてくれるから、発表する側はもっと思い切ることができる。向こうの人にとっては当たり前なこの好循環が、アメリカの魅力のひとつなのだと思えました。

どこに行っても、**Thank you!!**と言って握手を求めたら**You're welcome!!**と言いながらガチッと握手し返してくれる、お店の人が**Have a nice day!!**と最高の笑顔でおつりを返してくれる、あのアメリカ独特の雰囲気は僕はとて大好きです。彼らは日本人よりもお互いに「一歩近い」ように感じられました。スタバの店員とも、横でハンバーガーを食べるお姉さんたちにも、コスプレしている電車のおじさんにも市長にも、みんなどンドン話しかけます。いろいろな言葉をお互い交わしながらその **moment** を一番楽しんでいるようでした。空気を読み、雰囲気を感じて動く日本にはあまりないような光景。もうひとつの「当たり前」をそこに見た、新しい世界に出会ったような気分でした。今回こうして新しい文化に出会い、日本にはない新しい考え方や価値観、人間性に出会うことができたのも、こうしてアメリカに来ることができ、無事に、そして快適に7日間を過ごすことができたからです。サポートし、応援してくれた家族、友人、先生方。家族の一員として僕を受け入れ、何一つ不自由なく生活を送らせてくれたマーク一家やアメリカの友達。ほんとうにありがとうございました。そして僕はこの新しい世界に出会うような感覚、また違ったものの見方や文化に出会う喜びに強く惹かれました。もっといろんなところに行けば、もっと長くいれば、もっとたくさんの方に出会えば、もっといろんな話ができれば、もっと世界は広がる。そう心の底から感じた7日間でした。

ケントでの1週間

N.N

英語が好きで、以前から海外（特に英語圏の国）に行ってみたいと思っていたので応募しました。たくさんの応募者がいる中くじ引きで当選したときはもちろんうれしかったのですが、正直、楽しみよりも不安のほうが大きかったです。

その後、不安を大きくする出来事が… 出発の約2か月前にホスト（男の子）が決まりメールでやりとりしていたのですが、出発の1か月くらい前になって、「女の子のホストが見つかったので変わった」と言われました。そして更に、アメリカに着くと現地の先生から、またホストが別の子（Ereign）に変わったと知らされたのです。ホストの変更。それも二回も！こんなことがあるのかと、私はとても困惑しました。

Ereign の家族は全員フィリピン系で、ご両親と祖母はなまりが強かったので最初は全く聞き取ることができず、Ereign や Ereign の妹さんが英語や日本語で説明してくれてやっと理解できるという感じでした。このような状況に最初は戸惑っていた私ですが、ホストファミリーはとてもやさしく本当の家族のように接してくれたので、不安はすぐに消え、アメリカでの滞在を楽しむことができました。

到着した日は Cherry Blossom Festival の前日だったので、そこで披露するダンスのリハーサルのため学校へ向かいました。学校のエントランスには紙でできた桜や折り鶴、桜祭りとかかれた垂れ幕などが、日本語教室にはこいのぼりやアニメのポスター、日本地図まであり、こんなにも日本の文化が知られているのかと驚きました。フェスティバル当日も、ダンスをした後は書道コーナー、浴衣のファッションショーの見物、金魚すくいなど日本文化を楽しみました。

ホストの家ではもちろん、学校生活でも日本との違いがたくさんありました。授業に遅れた人は何も言わず平然と席についたり、先生の話聞きながら朝ごはん？やスナックを食べている人がいたり、一人一台持っているパソコンで YouTube を見たり…。北野では考えられないようなことがたくさん起こっていました。化学のテスト中には、集中できそうな音楽を先生が流していてとても新鮮でした。

数学の授業では数字はもちろん、ちょうど $\sin \theta$ や $\cos \theta$ 、グラフなどが使われていたので、ほかの授業と比べると理解しやすくてうれしかったです。また、日本語の授業では北野生がプレゼンをすると、みんな一生懸命メモを取りながら聞いてくれました。私は茶道についてのプレゼンをし、その場でお茶を点でて何人かに飲んでもらったのですが、「苦い」より「おいしい」と言ってくれた人が多くて驚きました。green tea だけでなく“抹茶”という言葉を知っている人もいました。

土曜日の午前中は予定がなかったのでゆっくり寝た後、Ereign とその兄弟と一緒にゲーム（太鼓の達人のようなものもありました）をしたり、「アナと雪の女王」を見ました。妹

さんは以前、日本語クラスで「Let it go」を習ったそうで、一緒に日本語で歌いました。

日曜日はイースターのお祈りのために教会へ行き、聖歌隊の歌やハンドベルの演奏を生で聞きました。演奏も建物も、素晴らしかったです。その後シアトルへ向かい、スペースニードルやパイクプレイスマーケット、高級住宅街などを案内してもらいました。土日は家族とたくさん話すことができよかったです。

学校では **Ereign** がたくさんの方を紹介してくれたのですが、その際 **Ereign** は名前と一緒に、ロシア系、日系、メキシカンなどということも教えてくれたので、日本とは比べものにならないほど様々な国の人がいることがわかり、多様性を感じました。

また、土地が広く、どこへ行くにも車を使うらしいのですが、どこを走っても自然が多かったです。道路の脇や庭などで桜が咲いていたのが印象的でした。大阪に帰ってきて一番に思ったのは、建物や人が多すぎる！しかも自然がほとんどない！！ということでした。もちろん日本は技術や勤勉さなど素晴らしい点がたくさんあると思いますが、それらに加えて、アメリカの自由でラフな雰囲気、ゆとりがある感じを、うまく日本人に合わせた形で取り入れることはできないのだろうかと思いました。

はじめに書いたように不安もありましたが、実際に行ってみたらあっという間で、充実した1週間でした。参加して本当によかったです。

この研修に関わって下さった方々、本当にありがとうございました。

最高に楽しかったシアトルでの1週間

H.T

「当たったらラッキーぐらいの気持ちで応募しよう。」

ホームステイに応募した時の気持ちは、こんな感じでした。もともと海外の文化を知ったり、海外に日本の文化を伝えたりするのが好きだった私は、有難いことに台湾研修にハワイ研修と、北野高校の海外研修を2つも参加させてもらっていました。そしてその2つの研修を通して、もっと英語が話せるようになりたい、もっと海外の文化を知りたいという気持ちはさらに強くなり、シアトルのホームステイに参加したいという気持ちもどんどん大きくなりました。しかし、その凄まじい倍率は1年の頃から噂に聞いていたし、既に2つも海外研修に参加している私にまた運が回ってくることはないだろう。応募した時の気持ちはそんな感じでした。なので、当選した時は本当に嬉しく、暫く信じられませんでした。

そんな感じで応募したので、行くと決まってからも全然不安は感じていなかったしホームシックにもならないだろうと思っていました。しかし、出発の日が近づくにつれ徐々に不安になっていき、シアトルの空港に着いた時には私のホームシックはピークになっていました。どうすれば良いのかわからなかったし、そんな風になった自分にも驚きました。ところが、いざホームステイファミリーと合流し、向こうでの生活を始めてみると、そんな気持ちはいつの間にか吹き飛んでいて最終的には日本に帰りたくなくなるほどでした。

アメリカの文化は日本にもたくさん入ってきているし、知っているつもりでしたが、向こうでは現地でしか味わえないような文化の違いに、始終驚きっぱなしでした。向こうでは平日は毎日学校に通ったのですが、まずその授業の時間割に驚きました。1日に5限あるのですが、なんとその時間割が毎日変わらないのです！（私のホームステイファミリーのKaylaは英語、日本語、化学、数学、写真の5科目でした。写真の授業は向こうでもなかなかある学校は少ないそうです。）また、授業も基本的に少人数で自由席だったり、1人一台ノートパソコンを持っていたりと、日本との授業スタイルの違いに初めは戸惑いました。しかし、その中でも特に驚いたのが、授業中の飲食です。アメリカでは授業中の飲食がOKということは有名だと思いますが、その自由加減が想像以上でした。私の場合はランチタイムの前の時間が化学だったのですが、みんな実験室のような教室で問題を解く間にもずっと机の上にスナックを置いて食べながらやっていました。そして何より、授業中突然何人かが立ち歩き出したと思ったら、後ろのいかにも実験器具の入っているような棚からカップヌードルを勝手に取り出し（なぜかその棚の中には大量のカップヌードルが備蓄してありました）、日本だとビーカーを洗うために使っているであろう水道で水を入れてそのまま電子レンジ（これまたなぜか後ろの壁際に置いてありました）で温めていました。カップヌードルが実験室に置いてあるという驚きと、カップヌードルって電子レンジで作れるん

だという驚きのダブルパンチでした。なので、化学の授業は授業中電子レンジの音が鳴りカップヌードルのいい香りがするというかなり楽しい感じでした。授業以外にも驚いたことは沢山あります。例えば、アメリカの文化の多様性です。地理の授業でも習ってはいましたが、実際に訪れてみると学校だけでもアジア系の人や南米の人、ヨーロッパ系の人など、本当に様々でした。Kayla に聞いた話ですが、シアトルはアメリカ中でも特に人種や文化の多様な地域だそうです。なので、よく言われるアメリカの人は食べる量が多いといったイメージは、シアトルに関しては一概には言えないなと思いました。(ただ、ドリンクのサイズは大きかったです。)

土曜日には学校がなかったのでシアトル中心部へと観光に行きました。PIKE PLACE MARKET では、Kayla のオススメのお茶屋さんに来てもらったり、本場の「FISH」を見たりしました。その日は晴天だったこともありたくさんの方が訪れていたのですが、Kayla が『very busy!』と繰り返していたのが印象的でした。(向こうでは混んでいるとよく busy を使っていました。) その後、ホストファミリーの方が事前にチケットをとってくれていたのので、スペースニードルに上りました。展望台からはシアトルの街が一望でき、また、マウントレニアやオリンピック山脈がとても綺麗に見えました。(恥ずかしいことにマウントレニアがシアトルの辺りにあることを知らなかったのですが、ファミリーの方が建物から山の名前まで、とても丁寧に教えて下さいました。)

日曜日は、イースターの日だったためホームステイファミリーの親戚の家に集まり、みんなで食事をしました。私はもちろん初対面だし、日本で言う元旦やお盆のような親戚の集まりだったのですが、まるで同じ家族のように当たり前のように受け入れて下さったので、そこにも日本との文化の違いを感じました。イースターは基督教のイベントなので、食事の前に全員で手をつないでお祈りをしたりと、現地の宗教なども身近に感じることができました。(Kayla 曰く、Kayla たちはそこまで熱心に信仰している訳ではないけど、こうやってみんなでご飯を食べたりするのが楽しいからイースターはやってるぐらいの感じだそうです。)

最終日に近づいてくると、現地のお店でも店員さんと普通に会話をしながら買い物をしたりできるようになり、短期間ではありますが英語力の伸びを感じることがありました。初めのうちは家族間の会話なども速すぎてほとんど聞き取れませんでした。後半の方には家族同士の会話にも混れたり、ジョークも理解できるようになってきたので、そうなるとみんなで会話するのがとても楽しかったです。特に、Kayla とは日本とアメリカのそれぞれの方言の話が盛り上がりました。私はそれまでアメリカの方言を全く知らなかったのので、とても興味深かったです。また、日本の方言を教えてあげると熱心に聞いてくれました。Kayla も日本語を勉強している身なので、お互いの言語の話は共通の興味として盛り上がるので、来年参加される方は是非話してみるといいと思います。また、アメリカの大統領選挙の話も家族全員でとても盛り上がりました。日本で報道されていることだけではわからないような、現地の本当の意見や感覚に触れることができ、とても貴重な体験で

した。普段から日本でニュースを見ていれば普通に理解できる内容だったので、来年行かれる方はアメリカの政治などに関しても事前にある程度は敏感になっておくといいと思います。

私がシアトルで経験した 1 週間は本当に貴重なものでした。特に、土日の 2 日間は恐らく私が日本語を話せるようになってから初めてだと思いますが、全く日本語を使わずに過ごした 2 日間だったので、とても刺激になりました。正直、台湾に行けてハワイに当たってまさかシアトルまで当たるとは思っていなかったもので、自分でも驚き、感激しています。同時に、私をシアトルでのホームステイに参加させてくれた両親、引率して下さった先生、その他支えて下さったすべての先生方、そして私を温かく迎え入れて下さったホームステイファミリーに心から感謝しています。ありがとうございました。

The special week with Rachel

S.A.

私は一週間、アメリカはワシントン州、ケントに行きました。一週間はあっという間に過ぎ去りました。私を迎えてくれたのはレイチェルです。

初アメリカということで、緊張するのが普通なのでしょうが、私は全く緊張も不安もなく、ただただ楽しみで仕方がありませんでした。実際、驚きと発見の連続で、本当に楽しかったです！

まず驚いたこと、それは、着いたばかりの私たちが、”放っておかれた”こと。と言うのは、翌日の桜祭り（ケントウッド高校で行われた日本文化をめぐるイベント。六稜祭に似ている。）のステージに出演するためのリハーサルが始まったのです。始まったの？と言う感じで始まり、気がつくと終わっていて、私たちは何故かピザを食べていた…。この時レイチェルは自分の仕事が忙しく、私にかまっていられなかったのです。断っておきますが、レイチェルは私にとっても良くしてくれました。ただ、彼女は日本クラブのメンバーだったので仕方がなかったのです。

桜祭りは、ケントにある4つの高校が集まるイベントです。私たちはダンスを踊り（私は特技のけん玉を披露）、観客を沸かせることに成功。その後、カリグラフィのコーナーでアメリカの名前を漢字で書いてあげました。”jya”や”fa”が難しかったですね。(笑) 金魚すくいをしたり、柔道の試合を見たりと楽しかったです。

レイチェルは日本が大好きで、部屋には壁一面にアニメのポスターが貼ってありました。アニメのDVDもいっぱい持っていて「これ知ってる？これは？」と聞かれたんですが、ほとんど分かりません。J-Popも、私よりよく知っています。よく「美少女戦士セーラームーン！」と、ポーズ付きで言います。(笑)レイチェルといるとメッチャ楽しいです。彼女は本当におもしろい。面白動画もいっぱい教えてくれました。また、両親は私を温かく迎えてくれました。もちろん、犬のジャックとシュガーも。

レイチェルの友達もいい人たちです。とても仲良くしてくれました。友達のうち、一人が私の名前を気に入って、「娘の名前をあなたと同じにするわ！」と言いだした時はどうしようかと思いました。漢字にも意味があると伝えるとますます喜んでしまつて。(笑)

また、授業の仕方も日本とは全く異なります。レイチェルはパソコンの授業をとっていて、そこで”CONK TV”を制作しています。動画や音楽の編集も、全部できます。暇になったらアニメを見、お菓子を食べて、遊びだします。ときには取材に出かけたり、私が観た授業の中でもっとも自由でした。

休日は、シアトルに行きました。シアトルはケントとは違って高いビルが立ち並びます。マーケットはとてにぎわっていて、人でごったがえしていました。私とレイチェルはSAKURA-CON というアニメの祭典に行きました。グッズ、ゲーム、声優、漫画...すごい

です！来場者の多くはコスプレをされていて、もう、ビックリ！日本ではまずあり得ないですよ。

映画も観にいきました。”Zootopia”面白いですよ。驚いたのは、アメリカの人は映画館で声を出して笑うんです。より映画が楽しく観られる気がしました。

日本に帰ってきて、今思うのですが、アメリカにいた一週間、私は人が変わったかのようによく喋って、はっきりものをいう女の子だったのです。理由はよくわかりません。レイチェルのせいですね、きっと。彼女があんなに面白いから。

今度は日本で会う約束をしました。次は日本語で話そうねと。

楽しい思い出をありがとう！Thank you so much!

Kentwood 高校滞在記（教員編）

理科 Y. T

■概要

○期間 平成 28 年 3 月 24 日から 3 月 31 日まで（8 日間）

○滞在先 ケントウッド高校 Kentwood High School
(25800 164th Avenue SE Covington, Wa)

○主な応接者 Ms. Karen Harrington (Assistant Principal)
Ms. Miyeun Jang

○日程

3 月 24 日（木） ケントウッド高校到着、ホストファミリー紹介

3 月 24 日（木）～29 日（火） KENTWOOD 高校滞在、学校行事、授業

3 月 24 日（木） 学園祭準備、リハーサル

3 月 25 日（金） 学園祭準備と学園祭「桜まつり」記念式典等（17 時～21 時）

3 月 28 日（月） 放課後 市庁訪問および見学、市長や市役所職員との交流

3 月 29 日（火） 放課後 お別れ会

○学園祭「桜まつり」のようす

学園祭では、北野高校生が舞台演技と書道による交流を行い、大盛況であった。

※舞台演技（創作ダンス）

けん玉、お手玉の演技を交えた、創作ダンスの披露をした。

楽しくリズムカルな演技で、観客は大喜びであった。

※書道

現地の高校生、および地域の人々の名前を漢字で書きプレゼントする。大人気で各人がそれぞれ 100 名以上の名前を書いてあげた。墨で書く文字はとても美しく、また文字選びにも心がこもっていた。自分のために選ばれた漢字の意味の説明を熱心に聞くなど、現地の人々は本当に嬉しそうだった。「ぜひ北野高校生に名前を書いてほしい」という人の列が絶えなかった。

○授業のようす

※英語による日本文化のプレゼンテーション

KENTWOOD 生を対象に、各自 3～10 回程度、各自工夫をこらしたテーマで発表した。受講者は、熱心に聞き、ノートをとり、質問していた。

※現地高校生との交流（英会話）

少人数の班に分かれ交替しながら、多くの生徒と会話を行った。皆、楽しそうに交流していた。

※現地高校生の通常授業への参加

■はじめに

典型的な昭和の高校生であった私には、高校時代に海外留学という概念はなかった。大学生になってアルバイトで自由になるお金をはじめて手にし、香港から陸路、中国に入国した。当時の中国は全土で人民服を着用し、人民元が闇で売買されている時代で、強烈なカルチャーショックを受けた。沢木耕太郎や金子光春に影響され、その後もアジアとヨーロッパに渡航を繰り返した。旅をすることがなかったら、人生は全く違ったものになっていたと思う。

高校生が外国に行く機会を得るならば、ぜひ協力したいと思う。今回、親しく思っている 129 期生に付き添うお話をいただいた。引率した北野高校の生徒ののびのびとした感性と、その短期間での成長と吸収力に感心した。前任の高校でも語学研修の引率をたびたび担当した。高校生と世界のつながりは少しずつ変化しており、また変わらぬこともあり、それもまた興味深い。

■ KENTWOOD 高校滞在で感じたこと

I ワシントン州について

- ① アメリカ西海岸は、世界を変えた数々のアイデアを生み出した地域である。そのうち、Microsoft 社、Boeing 社などはワシントン州を拠点としている。何か自由な発想を得る地域の特長があるのだろうか。KENTWOOD 高校近隣の Covington 図書館のデザインにも学習環境を快適にする工夫がこらされており、この地域の水準の高さを感じた。
- ② シアトル周辺の地形は、海と陸が入り組み、その気候風土は特色がある。森と水に恵まれている。(ワシントン州の地学等に関する文献を閲覧希望の方は物理準備室までご連絡ください)

II KENTWOOD 高校のようす

- ① KENT 地域で、高校生は自宅に近い高校に行く。KENTWOOD 高校周辺の生活水準は高く、KENTWOOD 高校生の学習環境は他に比べて良い様子である。
- ② 授業は、教科担当教員の教室があり、生徒は授業ごとに移動して受講する。休み時間に生徒は一斉に教室移動し、授業中に廊下で怠ける生徒は見当たらない（校外に

出ている場合もある)。授業中の学習態度もなかなか熱心である。派手な服装で懸命にノートを取り、作品をつくっている。

- ③ 実技授業は、BGM をかけるなど、リラックスした中で作品を作るように工夫されていた。端的に言えば、どの授業も「自由な雰囲気」が感じられた。
- ④ WIFI は、校舎内でパスワードなしで使える。
- ⑤ 教職員とスタッフの人々は皆、とてもフレンドリーで親切である。

Ⅲ 通学や送迎について

- ① 保護者は両親とも仕事を持ち、通学送迎や空港送迎は難しくなっている。車による送迎が可能な家庭からホストファミリーを選んでいるため、確保は年々困難になっている。KENTLAKE 高校に滞在した阿武野高校生は、スクールバスで通学する家庭に滞在していた。今後検討の必要があるのではないかと。
- ② 生徒はスクールバスか保護者の車、または徒歩で通学している。驚くべきことに30%程度は生徒が自分で自分の車を運転して通学しているようである。
- ③ シアトル全体で短期留学の受け入れは盛んで、各ホストファミリーが単独で空港で出迎えるケースが多いようである。シアトルタコマ空港の預け荷物受け取りと税関のシステムが最近変更になったようで(しばしば変更される)、多くの出迎え者が合流できずに苦労していた。KENTLAKE 高校からの出迎えは担当教員とホストファミリーが全員揃って行われるが、KENTWOOD 高校の空港出迎えは実質ホストファミリーに任されており合流に長時間かかった。KENTWOOD 高校側の対応は時間を要した。桜祭りのホストとなる年度は、北野高校引率教員がタクシー等で引率することを検討してはどうか。

Ⅲ 北野高校と KENTWOOD 高校の EXCHANGE PROGRAM

- ① 北野高校との交換留学プログラムの創設者 Phillip Davis 氏は北野高校との長い交流の歴史の大切さを強調してくださった。氏はすでに KENT 地域の高校を去り、創設者としての立場で「桜まつり」の記念式典等に関わっておられる。
- ② 一昨年度、KENT 地域の高校の校長、副校長の多くが異動し、新しいメンバーになっている。北野高校と交流に関わってきた管理職はすでに交代しているので、国際交流担当の日本語教員 Miyeun Jang 先生が大方の取り仕切っている。歴史の長い交流を継続させるために、担当者の交代で待遇が変化しないよう情報交換を密にすることが今後も必要であると感じた。
- ③ 本年度は、KENTWOOD 高校が、KENT 地域 4 高校合同の年間最大の学園祭である「桜まつり」のホスト校であった。桜まつりの運営担当者は、国際交流担当の日本語教員 Miyeun Jang 先生である。この滞在期間は Miyeun Jang 先生は大変多忙であった。KENTWOOD 高校生と北野高校からの派遣生徒は、状況に応じて臨機

応変に判断し自主的に行動すべき場面が多かった。しかし、幸いそのことが双方の高校生の成長につながったことも実感した。

- ④ 校務は分業体制が確立されており、交換プログラムに関わる人員は実質1名である。ホストファミリーと生徒がその点を補って支援している。

IV KENTWOOD 高校での北野高校生

- ① 北野高校派遣生徒が特別扱いを受けることなく、学園祭や授業に積極的に参加することを求められており、生徒は十分な能力を持って臨機応変に適切に対応した。各自の日本文化紹介のプレゼンテーションについて、現地の関係教員も絶賛しており、現地高校生の人気者になっていた。たとえば、すばらしいプレゼンテーションを行ったあとには、現地高校生が列をなして、自らの得意な球技についてアピールし、記念の WINNING BALL をプレゼントするなどしていた。アメリカの高校生は、多くが球技、スポーツに興味があり、一方アニメの人気もますます高まっているようである。日本と同様、趣味趣向の差ははっきりとしてきたが、生徒の努力もあり、今回はマッチングがうまくいった。しかし、当然異人種との交流なので異文化であればあるほど良いこともあるだろう。
- ② LINE の普及で、帰国後も現地の友人といつでも会話できる時代となった。よって別れ際に号泣というふうにならない。離れてもまたすぐ話せる安心感があるようだ。もちろん、友情や別れの切なさは昔と変わらない。さよならの時に派遣生徒が受け取ったプレゼントは手作りで心がこもっており、深い思いやりを感じた。またデザインも優れており胸を打つものであった。
- ③ 現地高校生やホストファミリーとの交流などの貴重な体験を通じて、派遣生徒はよく学び、現地の様式に適合し、成長を遂げた。学ぶ意欲もますます高まった様子であった。

■ 今後の派遣生徒へ

○アメリカは日本と違う → 適応しよう

日本式の几帳面さは期待できない。車社会であり、それは文化と生活様式のすべてに影響している。何もかも自分で考えて要求し、行動しよう。

受講したい授業があれば遠慮なくどんどん受けよう。決まったプログラムはない。すべて自分で選び参加するのだ。求めれば求めるだけいくらでも得られる。待っているだけでは何事も始まらない。

○交流の歴史 → 自ら行動しよう

長い歴史で KENT と北野は親しくなり、なじんでいる。北野高校生に特別な待遇はない。現地高校生と同様にその行動は自主性に任される。これこそが本来の交

流とも言える。しかし、自主的に行動しなければ徒に時は過ぎ去る。

○KENTWOOD 高校生のこと → 良い友人になろう

KENTWOOD 高校生は、大人の欠落を補って周囲を気遣う能力も気持ちもあると感じた。そして、日本の高校生と同じように悩み苦しんでいる。私が理科教員であるため、理系の進路の相談をしてきた KENTWOOD 高校生もいる。心は繊細で日本の高校生と同様に可能性に満ちている。北野高校生が語り合い、助け合える、良き友人となれる人々であると感じた。

これらのすべてがアメリカ的とも言えるし、それこそが国際交流である。大人にとっては長きにわたる交流、しかし、各々の高校生同士にとっては実に数年だけの、しかも初めての交流なのである。新鮮で貴重で二度とない体験となるのは間違いない。